

國學院大學學術情報リポジトリ

栄花物語の敬語：正篇と続篇と

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード (Ja): 栄花物語, のたまはす, 仰せらる, おはす, ものしたまふ キーワード (En): 作成者: 吉田, 永弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001701

栄花物語の敬語―正篇と続篇と―

吉田 永弘

キーワード…栄花物語、のたまはす、仰せらる、おはす、

ものしたまふ

一 はじめに

栄花物語は卷三十までの正篇とそれ以降卷四十までの続篇とに分けられる。正篇は万寿五（一〇二八）年二月、続篇は寛治六（一〇九二）年二月までの記事を書載している。

讃岐典侍日記の嘉承二（一一〇七）年十二月朔日の記事の「世継」が栄花物語を指すところからこの頃には成立していたとされる。栄花物語の成立に関する研究史を垣間見ると、現在では正篇と続篇の作者を別とするのが一般的で、続篇の内部に複数の作者を見るかどうかで見解が分かれて

いるようである。^①

正篇の作者と続篇の作者が別であること、正篇の最終記事から続篇の最終記事まで約六十年あることを踏まえると、異なる書き手や時代差を反映した何らかの言語事象の差異を見いだせるのではないかと期待される。これまでに、正篇と続篇の作者の違いによる根拠として、また、時代差の反映として言語事象に着目する研究は見られた。

例えば、野村二三「一九六三・一九六五」は、「返す返す」「頻る」「泣く泣く」「そこら」「ここら」「ばや」など正篇に見られるが続篇に見られない語、「めでたし」をかし「ものす」「打つ」など続篇に頻出する語を指摘して、正篇と続篇とで作者が異なることを論じている。また、川崎浩子

「二九六七」は「おぼし急がせたまふ」のような例を三重敬語と呼び、「おぼす」の複合語と比べて続篇での使用が多いことを指摘している。一方、宮腰賢「一九七四」は、正篇前半・後半・続篇に分けて補助動詞「きこゆ・きこえさす・まゐらす」を調査し、「きこゆ・きこえさす」については、漸次減少の傾向、「まゐらす」については、正編後半以降で急増する傾向が見られる」とし、さらに、「まゐらせさせたまふ」という次の時代に結びつく用法が続篇に見られることを述べて、正篇と続篇との時代差を指摘している。その他、続篇の内部の差異に関して、文の長さや用語、表現に着目した加納重文「一九九二」や、「殿」などの人物呼称や官職名での呼称に着目して論じた加藤静子「二〇〇七」もある。

本稿も同様の興味関心から、敬語を取り上げて考察する^③。具体的には、「言ふ」の主体敬語で最高敬語に相当する「のたまはす」と「仰せらる」を第二節で、「あり」の主体敬語の「おはす」と「ものしたまふ」を第三節で取り上げ、それぞれ正篇と続篇とで差異が見られることを指摘する。テキストは、梅沢本を底本にして校訂した新編日本

古典文学全集の本文を使用し、引用末尾に巻数と頁数を掲げる。

二 「のたまはす」と「仰せらる」

二・一 先行研究

「仰せらる」は「命じる」意の「仰す」に「らる」が後接した形で、「お命じになる」意から「おっしゃる」意に変化した後、「のたまはす」に変わって「言ふ」の最高敬語の形として用いられるようになる（森野宗明「一九七一」）。この交替現象について、穂田定樹「一九七六」では、源氏物語、枕草子、栄花物語（正篇）、大鏡、今昔物語集を資料として用法の差にも着目して論じている。

まず、「仰せらる」には、シテ（動作主体）が上位者でウケテ（動作客体）が下位者であるという関係規定性が「極めて強固に保持されている」ことを指摘している。例えば、源氏物語、枕草子の「仰せらる」には、用例1のような上位者から下位者へという方向の例しか見られないのに対して、「のたまはす」には、用例2のような下位者から上位者へという例や用例3のようなウケテの分明でない例も見

られるという。

1 (中宮↓清少納言)、「いますこし近うなりてを」など
仰せらるれど、出でぬ。(枕草子、二六〇段、四七一頁)

2 (関白道隆↓中宮)「ゆかしき御文かな。ゆるされはべらば、あけて見はべらむ」とはのたまはすれど、(枕草子、二六〇段、三九六頁)

3 (小少将↓夕霧)「落葉宮ハ母御息所ノ」御服のほどは、一筋に思ひ乱ることなくてだに過ぐさむとなん深く思しのたまはするを、……(源氏物語・夕霧、四七七頁)

ところが、栄花物語、大鏡では「ウケテ意識の微弱な用法が見られるようになる」として和歌を承けた栄花物語の例(用例4)、ウケテが明確でない大鏡の例(用例5)を挙げている。

4 堀河の女御、松風の音を聞しめして、

松風は色や緑に吹きつらんもの思ふ人の身にぞしみける

と仰せられけり。(卷十四、一五五頁)

5 (村上帝)「故宮の、いみじうめざましく、やすからぬ

ものに思したりしかば、思ひ出づるに、いとほしく、悔しきなり」とぞ仰せられける。(大鏡、一一九頁)

また、使用数に関しても、大鏡で「仰せらる」が「のたまはす」を上回って用いられていることが示されている。ただし、関係規定性は保持されていて、相互の同一行為に「仰せらる」を用いるようになるのは、延慶本平家物語など時代が下ってからであることも指摘している。

このように、「のたまはす」から「仰せらる」への流れが示され、栄花物語も考察に加えられるのは、正篇に限定したものであるため、改めて、続篇を加えて観察していくことにしたい。

二・二 使用状況と考察

「のたまはす」と「仰せらる」の資料ごとの使用数をまとめたのが次頁の【表1】である。調査には『日本語歴史コーパス』平安時代編Ⅰ、鎌倉時代編Ⅰ・Ⅱ(国立国語研究所「二〇一六・二〇一七・二〇二三」を使用した。

【表1】「のたまはす」「仰せらる」の使用数

	のたまはす	仰せらる
古今和歌集	0	9
竹取物語	4	2
蜻蛉日記	12	2
大和物語	7	2
落窪物語	10	5
枕草子	36	78
和泉式部日記	56	0
源氏物語	176	28
紫式部日記	10	0
堤中納言物語	4	5
更級日記	0	4
大鏡	24	105
讃岐典侍日記	0	76
今昔物語集	1	65
宇治拾遺物語	1	46
十訓抄	4	61
とはずがたり	0	71
徒然草	2	25

「仰せらる」には、古今和歌集の九例すべてがそうであるように、「命じる」意も含まれており、枕草子には異なる事情が考えられるが（吉田永弘「二〇一九」、大きな流れとして、更級日記、大鏡あたりの院政期頃から「のたまはす」から「仰せらる」への交替が起きていると捉えられる。この流れの中に栄花物語を置いてみよう。次頁の【表2】は、栄花物語の巻ごとの用例数である。

正篇が「のたまはす」二六〇例に対して「仰せらる」六四例、続篇は使用数が少ないものの「のたまはす」九例に対して「仰せらる」二〇例、というように、使用数が逆転している。これを【表1】に照らし合わせてみると、続篇は院政期の様相を示していると言え、正篇と続篇との差異は「のたまはす」から「仰せらる」への歴史的な変化の反映であると見ることができる。

使用実態を少し詳しく見ていくと、「仰せらる」が命令の意で解せるのは、正篇六四例中三三例、続篇二〇例中九例というように割合として変わらない。正篇においても用例4に示した通り、命令の意とは解せない例がある。用例4のような和歌を承けた例は正篇に二例、続篇に三例見られる。ここでは続篇の例を挙げる。

6（梅壺女御ハ）御心地悩ましく思しめされけるころ、
ひぐらしの鳴くに、

明日までも聞くべきものと思はねば今日ひぐらし
の聲ぞ悲しき

など仰せらるる、いとあはれなり。（巻三七、四〇四頁）
次の用例7のように、「のたまはす」と敬意差があるよ

【表2】 栄花物語の「のたまはす」「仰せらる」

巻	のたまはす	仰せらる
1	12	3
2	15	1
3	5	3
4	10	2
5	8	5
6	9	2
7	15	0
8	22	2
9	2	4
10	9	2
11	6	4
12	15	3
13	7	3
14	12	2
15	4	0
16	17	3
17	2	1
18	5	3
19	1	2
20	1	0
21	4	1
22	1	0
23	2	2
24	3	1
25	8	0
26	23	2
27	15	1
28	6	2
29	12	5
30	9	5
正篇計	260	64
31	1	1
32	1	1
33	2	0
34	0	2
35	0	0
36	1	8
37	1	1
38	0	2
39	3	5
40	0	0
続篇計	9	20

うに見える例がある。

7 摂政殿（＝兼家）御覧じて、「まづ祝の和歌ひとつ仕
うまつるべし」と仰せらるるままに、「宵の間に」と
うちあげ申したれば、「興あり興あり、おそしおそし」
と殿ばらのたまはするに、「君をし祈りおきつれば」
と申したり。大殿いみじう興ぜさせたまひて、「おそ
しおそし」と仰せらるれば、「まだ夜深くも思ほゆる

かな」と申したれば、いみじう興じほめさせたまひて、

摂政殿、袍の御衣ぬぎて賜す。（巻三、一六一頁）

同じ「遅し遅し」という表現を承けて、殿ばらに「のた
まはす」を用い、摂政兼家に「仰せらる」を用いており、
この箇所だけを見ると「のたまはす」に比べて「仰せらる」
の敬意が高いようにも見えるが、同じ巻三で兼家に「のた
まはす」を用いた用例8のような例やひと続きの表現の中

で用いた用例9のような例もある。

8 「われもさてありし官なり」などのたまはせて、大殿（兼家）のなしたてまつらせたまひつるなりけり。（巻三、一五二頁）

9 御はらからの君達に、上忍びてこのこと（＝入内ノコト）をのたまはせて、「それ参らせよ」と仰せられければ、（巻一、五〇頁）

このように「のたまはす」と「仰せらる」とに敬意差は認められないが、完全な同義語というわけでもなく、命令文を承ける場合（用例9）や上位者から下位者への関係を明示する場合（用例7）に「仰せらる」を用いる傾向があるということなのである。

次に、続篇に目を向けると、「のたまはす」九例中、用例10のように「もの、のたまはす」の例が二例、用例11のように「おぼす」と並列して用いた「おぼし、のたまはす」の例が三例、というように、固定的な表現となつて用いられている。

10 かくと人聞えさせたまひしかど、うちうなづかせたまひて、もののたまはせざりけり。二十日ばかりもの

をのたまはずならせたまへるなりけり。（巻

三十七、四一二頁）

11 後の御せうとの権大納言も、上二所うせたまひて後、

世にもあらじなど思しのたまはせけれど、（巻

三十一、一九九頁）

「もの、のたまはす」に対して、「もの、仰せらる」という表現は用例12のように正篇にも続篇にも見られる。

「のたまはす」でしか表せなかった表現領域に「仰せらる」を用いるようになっていく過程が観察されるが、「仰せらる」が正篇でも「言う」意で用いられている一つの証左となるだろう。

12 内には聞しめして、ともかくものも仰せられでこそはあらめ、……などぞ、いとほしう思しめしける。（巻

五、二九一頁）

13 若宮ものいよく仰せられて、姫宮を挑みまうさせたまふ。（巻三十九、四八四頁）

一方、「おぼし、のたまはす」に対して、「おぼし、仰せらる」「おぼしめし、仰せらる」という例はなく、栄花物語以前にも確認することができない。大鏡には次のように

見られる。

14 「いかでかくは思し召し仰せらるるぞ。」（大鏡、

三二九頁）

続篇の「おぼし、のたまはす」は、「のたまはす」でしか表せなかったために用いられているのかもしれない。

なお、続篇全体の用例数が多くないこともあり、この観点からは続篇の巻による差を指摘することはできない。

以上、正篇と続篇との間に「のたまはす」から「仰せらる」への交替が見られ、歴史的な変化を反映したものであることを見てきた。

三 「おはす」と「ものしたまふ」

三・一 使用状況

中村幸弘「一九九五」は、源氏物語の「ものしたまふ」が「あり」の主体敬語として用いられることを示し、「おはします」▽「おはす」▽「ものし給ふ」という敬意差（四八頁）があることを指摘している。源氏物語では、「おはします」五〇九例、「おはす」七九〇例に対して、「ものしたまふ」も四二八例というように多くの例が用いられており、

他の作品と比べて突出していることを同時に指摘している。それを確認するために、先と同様、『日本語歴史コーパス』で「ものしたまふ」の使用状況を観察してみよう。資料ごとの使用数をまとめたものが次の【表3】である。

【表3】「ものしたまふ」の使用数

竹取物語	1
大和物語	16
平中物語	4
蜻蛉日記	19
落窪物語	26
枕草子	1
和泉式部日記	1
源氏物語	428
紫式部日記	2
更級日記	1
堤中納言物語	4
大鏡	4
讃岐典侍日記	1
宇治拾遺物語	1
十訓抄	2
とはずがたり	2
徒然草	2

「ものしたまふ」が源氏物語に特徴的な表現と言えることが確認できる。

次に、栄花物語の使用状況を観察すると、「あり」の主体敬語に相当する語としては、圧倒的に「おはします」を使用している。「おはす」「ものしたまふ」は、両者を合わせても「おはします」の三割程度である。⁵⁾ 次頁の【表4】

は「おはす」「ものしたまふ」の巻ごとの使用数をまとめたものである。括弧内はそのうちの会話文で用いた例である。参考までに「おはします」の使用数もあわせて掲げる。

正篇では「おはす」の例が「ものしたまふ」を大きく上回るが、続篇では「おはす」の例が少なく「ものしたまふ」の例が多くなるといように、正篇と続篇とで異なりが見

【表4】 栄花物語の「おはす」「ものしたまふ」

巻	おはす	ものしたまふ	おはします
1	78 (3)	2	101
2	26 (1)	2	71
3	40	2	40
4	34	3	52
5	35 (4)	3 (1)	45
6	0	0	26
7	5	1	38
8	23 (1)	1	95
9	1	0	42
10	10 (2)	1 (1)	48
11	3 (2)	1	18
12	9	2 (1)	67
13	5 (2)	0	62
14	14 (1)	1	32
15	4 (2)	0	23
16	21	1	34
17	4	0	34
18	2 (1)	0	11
19	0	1	20
20	1	1	6
21	8	1	19
22	0	0	11
23	1	0	12
24	4	1	13
25	3	0	54
26	9 (3)	3 (3)	43
27	25 (2)	5 (5)	23
28	2	0	35
29	3 (1)	0	58
30	3	0	48
正篇計	373 (25)	32 (11)	1181
31	1	10	49
32	1	8	23
33	0	3 (1)	29
34	0	4	73
35	0	4	4
36	4	6	108
37	1	3	32
38	3 (1)	14	50
39	4	8	78
40	0	1	31
続篇計	14 (1)	61 (1)	477

られる。⁽⁶⁾

正篇における地の文での使用例を比べてみると、源氏物語と同様に、「おはしますVおはすVものしたまふ」という敬意差が観察される。次の例は、女御に「おはします」、少将に「ものしたまふ」を用いている。

15 宣耀殿女御は、いみじうつくしげにおはしましければ、帝も、わが御私物にぞいみじう思ひきこえたまへりける。帝、箏の御琴をぞいみじう遊ばしける。この宣耀殿女御に習はさせたまひければ、いとうつくしう弾きとりたまへりけるを、女御の御はらからの済時の少将、つねに御前に出でつつ、さりげなう聞きけるほどに、いみじうよく弾きとりたまへりければ、上、いみじう興ぜさせたまひて、召し出しつつ教へさせたまひて、後々は御遊びのをりをりはまづ召し出でて、いみじき上手にてぞものしたまひける。(巻二、二九頁)

正篇の「ものしたまふ」の上限は次に示すように中納言である。

16 今の帝の御叔父義懐の中納言は、か的一条の大納言の大君の御夫にてもものしたまひければ(巻二、一二五頁)

一方、「おはす」は大臣に用いた例が見られる。

17 ただ今の太政大臣にては、基経の大臣の御子、四郎忠平の大臣、帝の御伯父にて、世をまつりごちておはす。

(巻二、二二頁)

このように、正篇では、源氏物語と同様に、「おはしますVおはすVものしたまふ」という敬意差が観察される。しかし、続篇では使用状況が変わる。「おはします」の敬意が最も高い点では変わらないが、「ものしたまふ」の使用数は「おはす」の使用数を上回り、敬意の度合いも上がっている。次の例は、卷三十一の続篇の冒頭部分で、実際の人物ではなく、源氏物語の登場人物であるが、后や大臣に「ものしたまふ」を使用している。

18 入道殿うせさせたまひにしかども、関白殿、内大臣殿、女院、中宮、あまたの殿ばらおはしませば、いとめでたし。督の殿、皇太后宮のおはしまさぬこそは、口惜しきことなれど、いかでかはさのみ思ふさまにはおはしまさん。光源氏隠れたまひて、名残もかくやとぞ、さすがにおぼえける。めでたきながらも、あはれにおぼえさせたまふ。后宮、右大臣殿、薫大将などばかり

ものしたまふほどのおぼえさせたまふなり。(巻三十一、一八七頁)

實在の人物では、次のように大納言に用いた例がある。

19 入道の大納言とは、四条大納言にものしたまふ。(巻

三十一、一九八頁)

次の例は、中納言に「ものしたまふ」、少将に「おはす」を使用しており、「ものしたまふ」の方が「おはす」より敬意が高いように見える。

20 実成の中将は、そのころ右兵衛督にて中納言にてもものしたまひ、大式になりたまへり。御子は男子一人、公成宰相とて、滋野井の兵衛督とて、かたちはいとよく、よき上達部にてもものしたまふ。女子は中宮権大夫の上にてものしたまふ。今女一所ものしたまひしは、顕基の中納言とて、故源民部卿の子を関白殿の子にせさせたまへる、婚取りたまへりしかど、男子一人生みおきてうせたまひにしかば、このごろ十五六ばかりにて、資綱の少将とておはす。(巻三十一、一九九頁)

次の例も、民部卿の子のうち、宰相中将に「ものしたまふ」、異腹の子に対しては「おはす」を使用しており、「も

のしたまふ」の方が「おはす」よりも敬意が高いように見える。

21 この民部卿は、男一人、宰相中将にてもものしたまひしは、こぞの春うせたまひにき。異腹どもにはいと多くおはすべし。(巻三十九、四八七頁)

なお、続篇の「おはす」の上限は上達部である。

22 「……」と申したまふ上達部もおはす。(巻三十九、四六九頁)

このように、正篇と続篇とでは「おはす」と「ものしたまふ」の使用状況が異なり、「ものしたまふ」の敬意の度合いが続篇では高くなっている。なお、前節と同様に、この観点からも続篇の巻による差を指摘することはできないようである。

三・二 現象の解釈

「おはす」と「ものしたまふ」の正篇と続篇との差異をどのように考えればよいのだろうか。【表3】で見たように、「ものしたまふ」は源氏物語に突出して多く、源氏物語以降の資料ではその使用は微々たるものである。「ものした

まふ」の敬意が高くなる現象は歴史的な変化とは捉えられないのである。一方、「おはします」「おはす」の使用状況はどのようなものであるのか、【表3】で「ものしたまふ」の使用が見られた資料における「おはします」「おはす」の使用数を『日本語歴史コーパス』で検索してみたものが、次の【表5】である。

【表5】「おはします」「おはす」の使用数

	おはします	おはす
竹取物語	13	16
大和物語	43	8
平中物語	4	4
蜻蛉日記	35	21
落窪物語	32	174
枕草子	67	47
和泉式部日記	45	14
源氏物語	509	790
紫式部日記	23	13
更級日記	6	11
堤中納言物語	11	46
大鏡	523	242
讃岐典侍日記	41	5
宇治拾遺物語	91	116
十訓抄	43	65
とはずがたり	163	22
徒然草	14	12

「おはします」との使用率の差異は資料ごとにあるが、「おはす」は消滅していくわけではなく、源氏物語以降も使用され続けていることがわかる。続篇の「おはす」「ものしたまふ」の使用状況は「おはす」から「ものしたまふ」へという歴史的な変化を反映したものとは言えないのである。

栄花物語は源氏物語の影響を受けていると言われるが、特に続篇の冒頭部分は、用例18で示したように源氏物語を引き合いに出した記述から始まっている。それについて松村博司「一九七八」は「一体に続篇の作者は、正篇の作者と異なつて、『源氏物語』に倣う意識を露骨に見せており、ここもまず『源氏物語』に倣うことからはじめたのである」（四七四頁）と述べている。こうした続篇作者の態度を踏まえると、「ものしたまふ」の使用もその一端を示すもので、源氏物語の文章から「ものしたまふ」が特徴的な敬語表現であることに続篇の作者が気づき、意識的に使用したものであると思われる。正篇の作者が「ものしたまふ」を源氏物語と同じような敬意差の度合いを示す表現として取り入れたのは、源氏物語の成立から近く、「おはします」おはすⅴものしたまふ」という敬意の度合いを共有できていた

ことによるものと言うことができるのに対して、続篇の作者の時代には「ものしたまふ」を用いなくなっていたものの、源氏物語の特徴的な表現として受け入れて「おはします」の次の段階に位置する敬語表現として使用した結果が、「おはす」と「ものしたまふ」の使用状況に現れていると言うことができるだろう。正篇と続篇とでの「おはす」と「ものしたまふ」の使用状況の差異は、歴史的な交替現象を反映したものではないが、「ものしたまふ」の位置付けが変わる中で生じた現象なのである。

四 おわりに

本稿では、栄花物語の正篇と続篇とに見られる言語事象の差異を示すために二つの事例を取り上げて検討した。本稿で述べたことをまとめると次のようになる。

- 1 正篇と続篇とで「のたまはす」から「仰せらる」への交替がある。これは「言ふ」の最高敬語が「のたまはす」から「仰せらる」へ推移するという歴史的な変化を反映したものである。

- 2 正篇と続篇とで「おはす」から「ものしたまふ」へ

の交替がある。また、「ものしたまふ」の敬意の度合いが正篇に比べて続篇では高くなる。これは歴史的な変化を反映したものではなく、続篇作者の源氏物語に倣う表現意識が反映したものである。

この正篇と続篇との差異は作者が異なるものであることを示すが、時代差のある作者の異なりが言語事象に現れる場合には、歴史的な変化を反映する場合と作者の表現意識が反映する場合とがあることを示した。栄花物語には紫式部日記をはじめとした原資料があり、その原資料の言語が正篇と続篇との間に影響を与えたとしたら、前者の時代差の反映として現れることはあるだろうが、後者の表現意識の差異としては現れにくいものだろう。少なくとも続篇の「ものしたまふ」の使用は原資料の影響によるとはいにくいものである。こうした作者の表現意識に注意して他の資料を扱うことを考えると、時代差のある資料間の言語事象の共通点と相違点は、必ずしも時代差を反映するものではなく、それぞれの資料にはその個性があり、歴史的な変化を描く場合にはその個性を吟味したうえで取り扱うことが必要であるという当然と言えば当然のことに改めて気づ

かされる。

注

- (1) 栄花物語の成立と作者の研究史については、木村由美子「一九九七」が簡潔にまとめていて参考になる。
- (2) 言及がなく補助動詞と見ていないのかもしれないが、正篇（後半）にも「分ちまゐらせさせたまひて」（巻十八、三二〇頁）のような例は見られる。
- (3) 栄花物語の敬語の概説が松村博司「一九七三」にあるが、正篇のみを対象としている。
- (4) 松村博司「一九八五」によって異同を見ると、「つねにのたまはすれば」（巻二、一〇七頁）を「つねにおほせらるれば」（富岡甲本）、「三所ぞおはします」（巻二、一〇七頁）を「三所ぞおはする」（富岡甲本）とするなど、本稿で対象とする形式に異同がある箇所があるが今は考慮しない。なお、続篇にはほぼ異同は見られない。
- (5) 他に「ものしたまふ」より敬意の高い「ものせさせたまふ」という形式が正篇に一一例、続篇に二六例見られ、「ものしたまふ」と同様に続篇に多く見られる。
- (6) 野村一三「一九六三」で「ものす」が続篇に頻出する、

とを指摘しているが、「ものしたまふ」が多いことによるものである。

- (7) 注5で触れた「ものせさせたまふ」は、続篇二六例中二〇例が卷三十七（八例）・三十八（五例）・三十九（七例）に集中している。

使用テキスト

栄花物語・枕草子・源氏物語・大鏡……新編日本古典文学全集（小学館）

- 国立国語研究所 (2016) 『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編Ⅰ 説話・随筆』（短単位データ 1.1／長単位データ 1.1） <https://crd.ninjal.ac.jp/chj/kanakurahtml>
- 国立国語研究所 (2017) 『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編Ⅱ 日記・紀行』（短単位データ 1.0／長単位データ 1.0） <https://crd.ninjal.ac.jp/chj/kanakurahtml#nikki>
- 国立国語研究所 (2023) 『日本語歴史コーパス 平安時代編Ⅰ 仮名文学』（短単位データ 1.3／長単位データ 1.3） <https://crd.ninjal.ac.jp/chj/heianhtml#kanabungaku>
- 国立国語研究所 (2023) 『日本語歴史コーパス』バージョン 2023.3 <https://crd.ninjal.ac.jp/chj/>

参考文献

- 穂田定樹「一九七六」『中古中世の敬語の研究』（清文堂出版）、第六章「〈宣はす〉〈仰せらる〉とその周辺」
- 加藤静子「二〇〇七」『栄花物語』続篇考―敬避表現と人物呼称から―『栄花物語の新研究―歴史と物語を考える』（新典社）
- 加納重文「一九九二」『歴史物語の思想』（京都女子大学）、第八章「続篇の構成」
- 川崎浩子「一九六七」『栄花物語の成立―主として三重敬語から見て―』（『国文』27、日本文学研究資料叢書『歴史物語Ⅰ』（有精堂）所収
- 木村由美子「一九九七」『栄花物語の成立と作者』（『歴史物語講座 第二巻 栄花物語』（風間書房）
- 中村幸弘「一九九五」『補助用言に関する研究』（右文書院）、第三章「ものし給ふ」考、第四章「存在詞「ものし給ふ」小考」
- 野村一三「一九六三」『栄花物語の作者―主として用語から見て―』（『国語国文学研究』25
- 野村一三「一九六五」『栄花物語続篇と周防内侍』（『苦小牧駒沢短期大学研究紀要』1、日本文学研究資料叢書『歴史物語Ⅰ』

（有精堂）所収

- 松村博司「一九七三」『栄花物語・大鏡の敬語』（『敬語講座2 上代・中古の敬語』（明治書院
- 松村博司「一九七八」『栄花物語全注釈（七）』（角川書店
- 松村博司「一九八五」『栄花物語の研究 校異篇（上・中・下・続篇）』（風間書房）
- 宮腰賢「一九七四」『栄花物語における補助動詞「まゐらす」について』（『東京学芸大学紀要（人文科学）』25巻2号、『まゐる・まゐらす考』（桜楓社）所収
- 森野宗明「一九七二」『古代の敬語Ⅱ』（『講座国語史5 敬語史』（大修館書店）
- 吉田永弘「二〇一九」『転換する日本語文法』（和泉書院）、第13章「主催」から「尊敬」へ―「仰せらる」と「くださる」―